

## The 4<sup>th</sup> Congress of AASPN 2023 参加記

山形大学脳神経外科

伊藤美以子

会長の白根礼造先生、師田信人先生のもと、2023年12月13日から15日まで横浜で開催された The 4<sup>th</sup> Congress of Asian-Australasian Society for Pediatric Neurosurgery (AASPN2023) に参加させて頂きました。日本では初めての開催となる記念すべき AASPN congress で、座長の機会も頂き、楽しく貴重な経験となりましたことを深く感謝申し上げます。

国内開催とはいえ国際学会での発表は非常にハードルが高く、締め切り間際に絞り出すように演題登録を行いました。というのも、私の所属大学のある山形県は高齢者が多く、若者は少なく、当然の如く小児神経外科の患者さんも少なく、都市部では研修医の間に経験する症例数を、生涯かけても経験しないかもしれない環境が原因と考えられます。故に、診療への気概はあるものの、普段から学会は学術的発信より学習の場と捉えており、今回も初めのうちは「ワタシキクホウ」と構えておりました。振り返ると、繰り返し届けられた広報メールの波に絡め取られたような感じでした。

演題名は”Image Overlay Surgery attempt of spinal dysraphism”。二分脊椎における image overlay surgery (IOS)の有用性について、flash oralでの採択となりました。立ち足はだかるは英語の壁。留学経験もなく、英語も得意ではないため、GoOgle翻訳の音声ツール(速度も選べる優れたもの)で練習を行いました。当初「ゆっくり大きな声で話せば大丈夫」といった周囲の温かい声は、次第に「たどたどしく日本語を話す外国の人は微笑ましく、逆もまた然り！」と、開き直りを勧めてくるようになりました。また、座長の任は光栄に思いつつも、気の利いたコメントを言えそうもない語学力に項垂れていたところ、とうとう当教室の教授から「外国人はディスカッション好きで勝手に盛り上がってくれるし、コメントなんて求めないから安心して良い」という激励が下され、何とかなるような気持ちになっていきました。

師走に恥じぬスピードでAASPN2023の幕開けとなりました。私は2日目からの参加で、同日にポスターセッションの座長、3日目に発表を予定しておりました。浮き足立って会場に入ると、ほとんどの参加者の髪の毛が黒いことに親近感を感じました。また、JSPNの組織の一つである国際委員として、担当時間には各会場でトラブル対応のために待機する、といった役割もありましたが、運営の方々の献身にて何事もなく任務完了となりました。

先行するポスターセッションを偵察すると、期待通りの盛り上がりが目に入り、安堵でほくそ笑むうちに出番を迎えました。しかし、ポスター自体は人数分の提示があるものの、集まった演者は3人、直前まで待っても3人。不穏な空気の中でセッションを開始することとなりましたが、

もはや制限時間を気にしなくなった演者達によって、フランクな解説が豊富に加えられた屈託のない発表の場となりました。更には、座長を御一緒した JSPN の先生の高いコミユカ（素敵！）によって、それぞれのお国事情（台湾・インドネシア・シンガポール）や病院事情にも話題が広がり、思いがけずアットホームなセッションとなって笑顔で幕を閉じました。

3 日目、ついに発表の日。極限までセリフを削り、カンペ無しで乗り切れるように準備しました。なお、座長のおひとりは JSPN からの選出でしたので、質問を受けた場合に聞き取りも返答も自信のなかった私は「通訳頂くのはありますか？」と、良からぬことを考えつつ待機。ところで、flash oral という形式も今回のセッションの進行自体も私には大変新鮮に感じられました。例えば、二分脊椎といったような各テーマのセッションで、核となる口演後に多くの flash presentation が設けられ、多彩な発表を集中的に聞ける構成でした。そしてプログラムが進行し、1 時間後には終わっている、30 分後には、,, と自身の胸中カウントダウンも小刻みに更新され、遂に座長からの御紹介を頂くと、3 分後には終わっている、という思いで壇上にあがりました。横に長い会場でしたのでフロアの方々が目の前におられたため大変緊張し、同じところで 3 回も嘔むなど赤面しきりでした。しかし、アニメーションを駆使してビジュアルに力を注いだスライドは、例え言葉が通じずとも（？）ありふれた機器を用いた手術の工夫、という私の主張を伝えてくれたはず、と信じております。セッション終了後には JSPN の先生方より「お疲れ様！」と声をかけて頂き、悪くない気分での初国際学会は締めくくられました。

AASPN congress で各国の方々の発表を拝聴しながら、外国にも子供がいて、もちろん小児の患者さんもいて、診療を頑張っている先生がおられるという当たり前のことに初めて実感が湧きました。ポスターセッションでの交流や女性医師を取り巻く環境や生活に触れたセッションの影響かもしれませんが、（海を渡るような人は別次元）と感じていた先生方に、親近感どころか「みんなも頑張ってる」といった仲間意識が芽生え、診療への励みとなっております。小児神経外科に携わる先生の中には、科内あるいは地域で孤軍奮闘されている場合も少なくないと思われませんが、より多くの同じような存在に遭遇できる国際学会への参加は、発信や学習のためだけでなく、モチベーションの維持にも有用な方法かもしれません。今後もまた、いろいろな国や地域で頑張っておられる先生方の生の声が聞けるように、頑張っ国際学会に参加できればと思います。